

「航空保安①」

日本の

航空保安の 最先端

厳格化と円滑化の
両立を目指して

日本では2016年の伊勢志摩サミット、2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会など世界的に大きなイベントが続きます。また、先頃取りまとめられた「明日の日本を支える観光ビジョン」では、2020年までの訪日外国人旅行者数の目標が2000万人から4000万人に引き上げられるなど、ますます多くの方々が日本を訪れると考えられます。

出入国にあたって、テロやハイジャックなどを未然に防ぐためには、厳格な航空保安検査が欠かせません。一方で、大勢のお客さまがスムーズに移動するためには検査の円滑化も重要です。

これらをいかに両立させるかについて、国土交通省航空局安全部の島村淳部長に伺いました。

強まるテロ・ハイジャックの脅威

世界を見渡すと、国際的なテロ組織ISILの活動が過激さを増しています。日本も標的国と名指しされ、また、最近ではベルギー・ブリュッセル空港で発生したテロ事件で日本人が被害に遭うなど、日本にとっても決して無関係の出来事ではなくなってきました。

過去には、2001年の米国同時多発テロ事件に見られるように、飛行機そのものを用いたテロ事件も発生しています。こうした卑劣な行為を阻止するためにはセキュリティを厳重に確保しなければなりません。航空ネッ

トワークが地球のすみずみまで張り巡らされていることを考えると、一部の国だけではなく、各国が一丸となって取り組まなければなりません。

そのための世界共通のルールとして、国際民間航空機関(ICAO)が国際標準などを定めています。重要なのは、こうしたルールを厳格に遵守して全世界でセキュリティレベルを均一に保つことと、新たな脅威の可能性を事前に把握し、その対策のためにルールを強化していくことです。例えば2006年の英国での飛行機爆破テロ未遂事件で液体の爆発物が脅威となることが明らかになりましたので、国際ルールを見直して液体物の機内への

持ち込みを制限するという対策が取られました。また、米国同時多発テロ事件以降は、テロリストが操縦席に入ってきてられないように強化型コクピットドアの装備が義務づけられています。

飛行機の利用者は、純粹に旅を楽しむ人であったり、ビジネスパーソンであったり、善良な人々です。しかし、悪意を持ったテロリストやハイジャック犯がいる以上、厳しいセキュリティチェックを実施しなければなりません。厳格なチェックが善良な利用者の安全・安心を守っているということにご理解とご協力をいただきたいと考えています。

国土交通省 航空局 安全部長

島村 淳

しまむら・あつし ●1981年横浜国立大学大学院工学研究科修士課程卒業、同年運輸省(当時)入省、その後、運輸政策局総合計画課専門官、在カナダ日本国大使館国際民間航空機関代表代理、航空局無線課補佐官、国際航空課航空交渉官、国土交通省大臣官房参事官(航空保安対策)、航空局航空機安全課長、運航安全課長などを経て、2014年より現職。

厳格化と円滑化の両立の切り札「ボディスキャナー」

チェックの厳格化と円滑化は航空保安の両輪だと考えています。

訪日外国人旅行者が2000万人に近づき、リピーターや、団体ではなく個人で自由旅行を楽しむ方々が地方を訪れる機会も増えてきました。航空保安検査の円滑化のために、地方空港などでは今後の混雑を見越して保安検査場の対応能力を拡大していく必要があると考えています。

また、東京2020オリンピック、パラリンピック競技大会などの大きなイベントに向け、航空保安の厳格化と円滑化の取り組みを加速させていきます。その一例として2016年度からは、欧米の主要空港でも普及が進んでいる最先端技術を利用したボディスキャナーという保安検査機器を導入することとしました。

ボディスキャナーは、携帯電話の数の百分の1〜1万分の1程度の微弱な強さの「ミリ波」と呼ばれる電波を使って異物を検知するものです。人体に照射されても遺伝子を傷つけることはなく、子どもや妊娠中の方でも安心して検査を受けられます。

検査前には誤検出を防ぐためコート



ザインと機能性を兼ね備えた素晴らしいシステムが試験的に導入されています。このような優良事例などを私たちが学んでいき、わが国においてもスマートセキュリティを実現していきたいと考えています。

今後、厳格なセキュリティを確保しつつ、旅客の方の満足度も強く意識した保安検査場づくりが世界のスタンダードになっていくでしょう。残念ながら今の航空保安検査は快適とは言えませんが、いずれは航空保安検査も、「空の旅」への出発前に感じるわくわく感の一部になるものにしていきたいと考えています。近未来を感じさせるような保安検査場を通過することで、これから飛行機に乗り出

や上着を脱いで、ハンカチや定期入れなどポケットのなかのものをすべて出していただきます。準備ができたらボディスキャナーのなかに入って数秒間静止します。機種によっては旅客の自身に回転していただく場合があります。検査で異物の反応があった場合、検査モニター画面上の人の形をした絵のなかに異物の場所が表示されま

す。検査員は、異物の反応のあった所について、従来と同じような接触検査を行います。人の形の絵となっていることや、検査データも都度消去されるなど、先進的なボディスキャナーでは検査される方のプライバシー保護に十分配慮しています。ボディスキャナーは金属に限らず非金属も検知できるので航空保安検査の厳格化につながる一方、所要時間はわずか数秒間で済み、従来実施してきた全身の接触検査などに比べて所要時間の短縮が可能で、旅客の方の負担も軽減されます。ボディスキャナーの導入により、効率的に厳しい検査を実施することで、混雑の緩和に役立つとともに検査員の作業負担の軽減にもつながると考えています。

近未来の航空保安検査

厳格化と円滑化は日本だけの課題

発するという期待感を高めながらも、裏では厳しいチェックが進んでいる。そうした航空保安検査を目指していきたいと考えています。

エアラインに望むこと

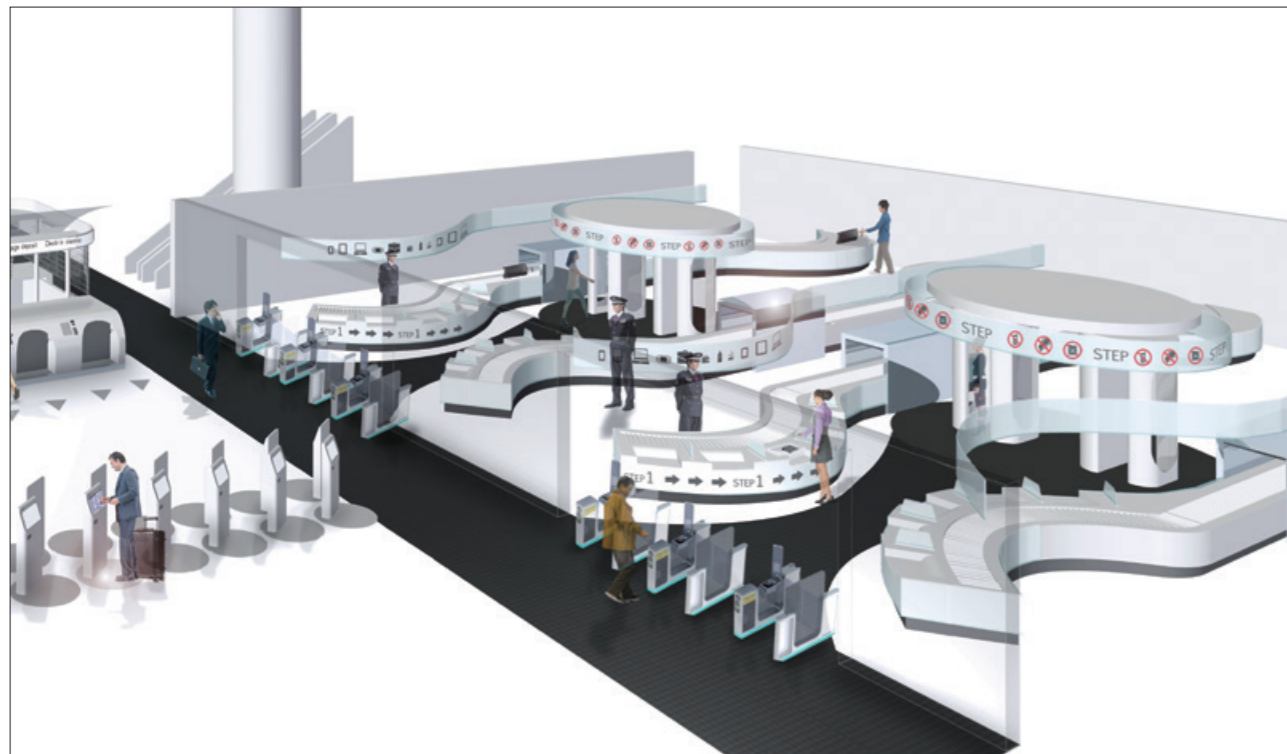
航空保安検査の厳格化と円滑化を両立させるには、官民を挙げた取り組みが不可欠です。

制度的には国がルールを定め、エアラインがルールに従って航空保安検査を実施していますが、エアラインにおいては、国からの指示により航空保安検査を実施しているという意識ではなく、自らの旅客、飛行機、貨物をテロ・ハイジャックからしっかりと守るために実施していると意識を持って、セキュリティの確保に努めていただきたいと考えています。

こうした意識、セキュリティメインドをエアラインも含め航空に携わる者一人一人が常に持って、日々の運航や業務を行っていただき、また、常に点検していただくことで、航空保安はさらに強固なものとなると期待しています。私たちも全体のレベル向上のためにエアラインと連携し、ともにわが国の空の安全・安心の確保に力を尽くしていきたいと考えています。

ではありません。世界中で飛行機を利用する旅客数は増えていくことが見込まれています。また、今後の世界情勢によっては、テロの脅威がますます強まることも考えられ、さらなる航空保安の強化が社会的に求められる可能性もあります。このような状況を放置すれば、今後、航空保安に関する人的・経済的コストはさらに増大し、保安検査場も混雑するなど旅客移動の円滑化からほど遠い状態になってしまいかもれません。

そこで、世界の空港管理者などの集まりである国際空港評議会（ACI）や航空会社の集まりである国際航空運送協会（IATA）などが、ICAOのサポートも受け、スマートセキュリティというコンセプトのプロジェクトを推進しています。これは、飛行機を利用する旅客の方々が空港に到着してから搭乗するまでの自然な流れのなかで、さまざまな航空保安検査を効率的に実施するものです。保安検査員や検査施設の配置を見直しながら、最先端のシステム化された機器を導入することで、旅客の方が少しでも快適に搭乗できるように随所に工夫がなされています。既にオランダ・アムステルダム空港のスキポール空港では、目を引く先進的なデ



スマートセキュリティのイメージ（提供：成田国際空港株式会社）

